

福祉用具を導入する事で 得られる効果と課題について

2021年11月16日 「介護ロボットセミナー」

社会福祉法人 福祉広医会 特別養護老人ホーム 悠悠タウン江波

池田 英寛 : 機能訓練指導員(柔道整復師・はり師・きゅう師)

永田 竜馬 : ケアワーカー(介護福祉士)

本日の内容

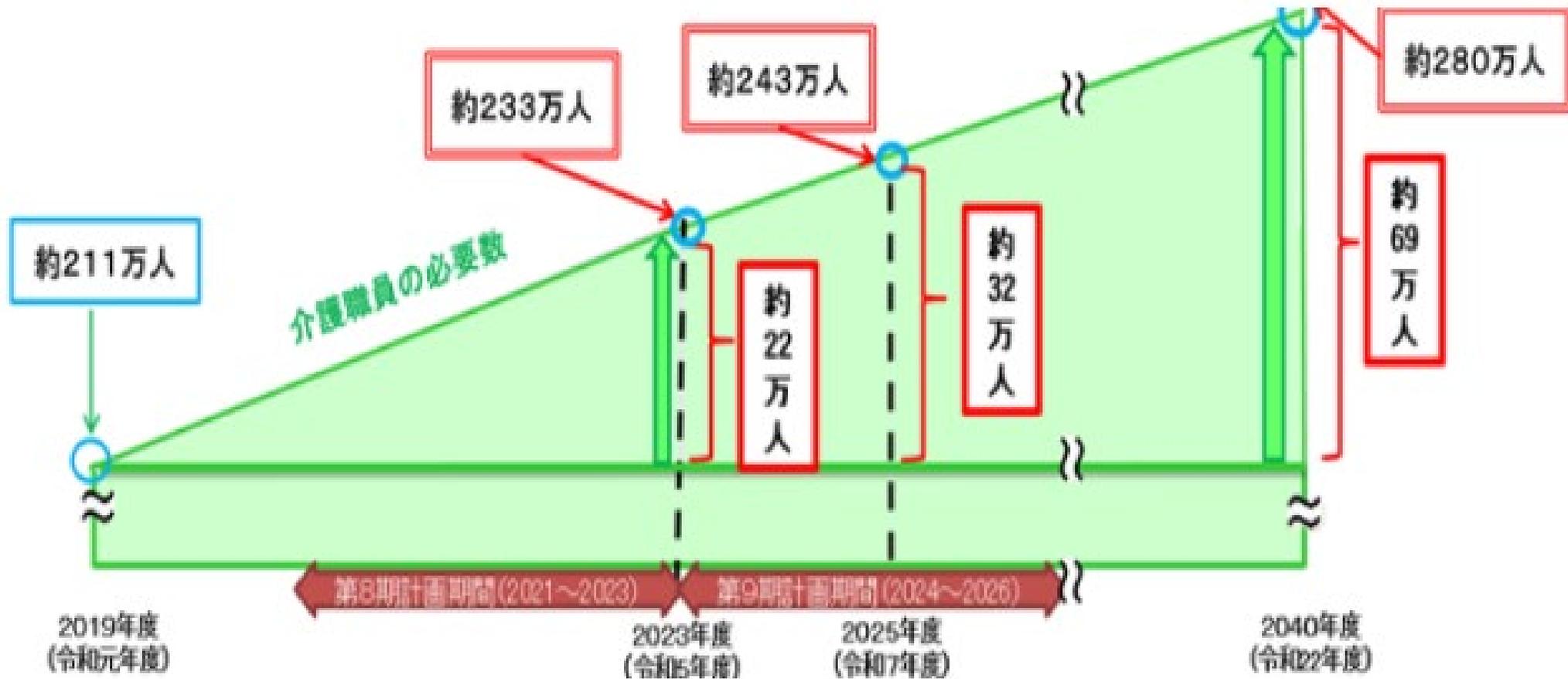
1. 業界の問題
2. 福祉用具の活用について
3. 福祉用具の導入で得られる効果
4. 新たな課題

1.業界の問題

- ① 介護人材不足
- ② 腰痛問題

①介護人材不足

第8期介護保険事業計画に基づく介護職員必要人数



①介護人材不足

総合的な介護人材確保対策

介護職員の 処遇改善

- リーダー級の介護職員について他産業と遜色ない賃金水準を目指し、総額2000億円(年)を活用し、経験・技能のある介護職員に重点化した更なる処遇改善を2019年10月より実施
- ※ 令和3年度介護報酬改定では、介護職員の人材確保・処遇改善等にも配慮し、改定率を+0.70%とするとともに、更なる処遇改善について、介護職員間の配分ルールの柔軟化を実施。

(実績)月額平均7.5万円の改善

- 月額平均1.8万円の改善(令和元年度～)
- 月額平均1.4万円の改善(29年度～)
- 月額平均1.3万円の改善(27年度～)
- 月額平均0.6万円の改善(24年度～)
- 月額平均2.4万円の改善(21年度～)

多様な人材 の確保・育成

- 介護福祉士修学資金貸付、再就職準備金貸付による支援
- 中高年齢者等の介護未経験者に対する入門的研修の実施から、研修受講後の体験支援、マッチングまでを一体的に支援
- ボランティアポイントを活用した介護分野での就労活動の推進
- **他業種からの参入促進のため、キャリアコンサルティングや、求職者向け職業訓練の訓練枠の拡充、訓練への職場見学・職場体験の組み込み、訓練委託費等の上乗せ、訓練修了者への返済免除付きの就職支援金の貸付を実施**
- **福祉系高校に通う学生に対する新たな返済免除付きの修学資金の貸付を実施**
- **介護施設等における防災リーダーの養成**

離職防止 定着促進 生産性向上

- 介護ロボット・ICT等テクノロジーの活用推進
- 介護施設・事業所内の保育施設の設置・運営の支援
- キャリアアップのための研修受講負担軽減や代替職員の確保支援
- 生産性向上ガイドラインの普及
- 悩み相談窓口の設置、若手職員の交流推進
- ウイズコロナに対応したオンライン研修の導入支援、**副業・兼業等の多様な働き方モデル事業の実施**

介護職 の魅力向上

- 学生やその保護者、進路指導担当者等への介護の仕事の理解促進
- 介護を知るための体験型イベントの開催
- 若者層、子育てを終えた層、アクティブシニア層に対する介護職の魅力等の情報発信
- **介護サービスの質の向上とその周知のため、ケアコンテストの取組を情報発信**

外国人材の受 入れ環境整備

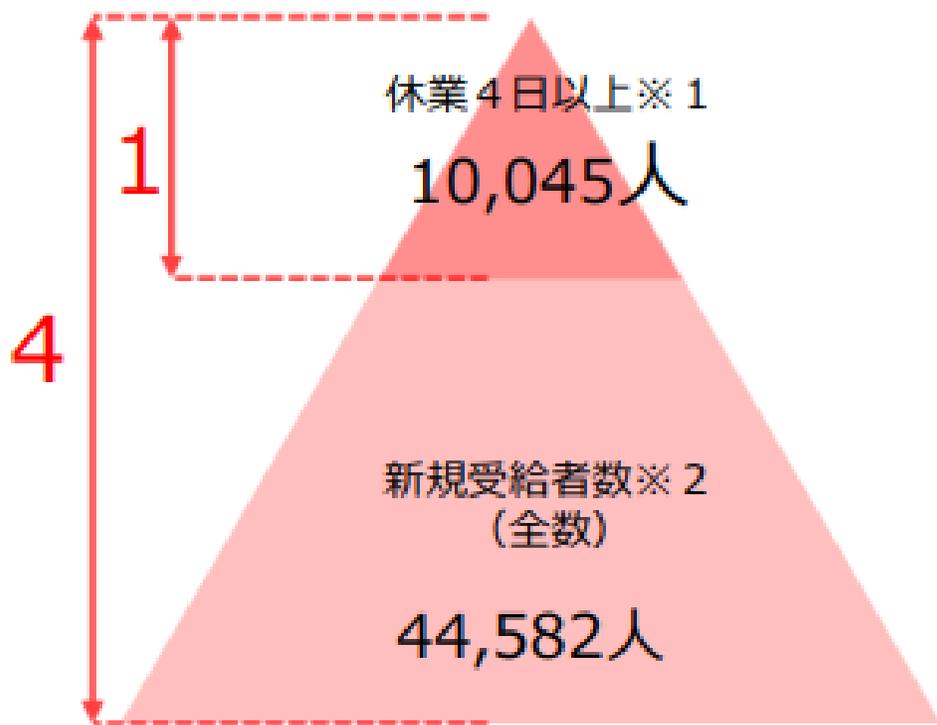
- 介護福祉士を目指す留学生等の支援(介護福祉士修学資金の貸付推進、日常生活面での相談支援等)
- 「特定技能」等外国人介護人材の受入環境整備(現地説明会等による日本の介護のPR、介護技能向上のための集合研修、介護の日本語学習支援、介護業務等の相談支援・巡回訪問の実施等)
- **送出国への情報発信の拡充等**

※下線部分は令和3年度予算における新規事業

②社会福祉施設の腰痛問題

社会福祉施設の労働災害発生状況

全体の労働災害は、
休業4日以上の労働災害の約4倍



【ポイント】

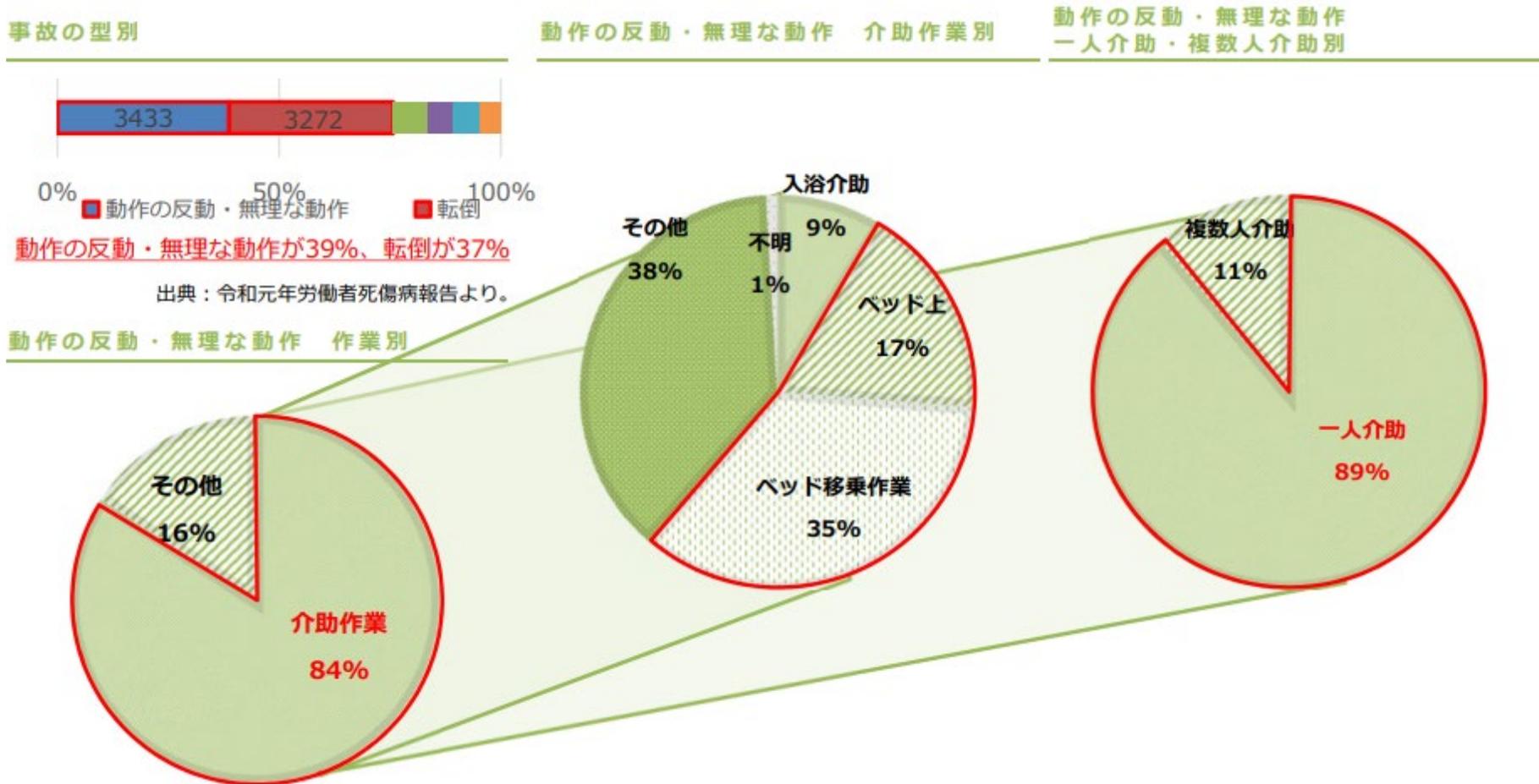
- ・労働災害の急増
- ・1か月以上の休業が5割

【厚生労働大臣より】

- ・労働災害の発生状況とその防止対策の必要性の周知と啓発
- ・介護作業中の腰痛や転倒
- ・高齢労働者の労働災害対策
- ・好事例の収集と情報共有

②社会福祉施設の腰痛問題

発生の要因



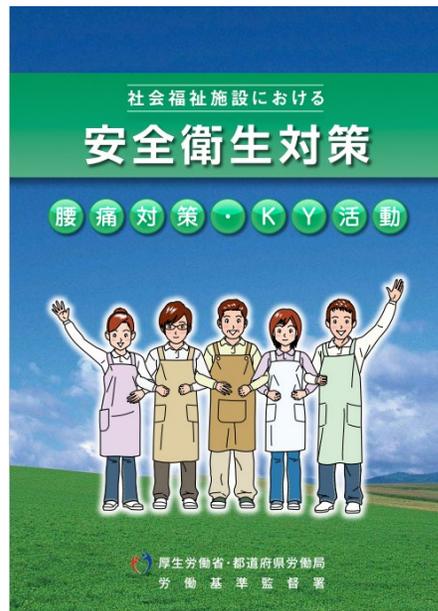
2.福祉用具の活用について

- ① 福祉用具活用の必要性とポイント
- ② 令和3年度報酬改定

①福祉用具活用の必要性とポイント

厚生労働省等の取組み(ツールの活用)

- A) 「職場における腰痛予防対策指針」の策定と改正
- B) 「社会福祉施設における安全衛生対策、腰痛対策・KY活動」



腰痛予防対策のポイント

- 施設長等のトップが、腰痛予防対策に取り組む方針を表明し、対策実施組織を作りましょう。
- 対象者ごとの具体的な看護・介護作業について、作業姿勢、重量などの観点から、腰痛発生リスクを評価しましょう。
- 腰痛発生リスクが高い作業から優先的に、リスクの回避・定見措置を検討し、実施しましょう。健康管理、教育にも取り組みましょう。

①福祉用具活用の必要性とポイント

財団法人テクノエイド協会 発行

福祉用具シリーズ

A) VOL.7 腰痛をなくすための福祉用具の活用

B) VOL.15 腰を痛めない介護・看護
～質の高いケアのために～



腰痛をなくすための福祉用具の活用

TECHNO
AIDS

福祉用具シリーズ Vol.15

腰を痛めない介護・看護
～質の高いケアのために～



②令和3年度報酬改定

報酬改定の目的

- A) 新型コロナウイルス感染症や大規模災害が発生する中で「感染症や災害への対応力強化」を図る
- B) 塊の世代の全てが75歳以上となる2025年に向けて、2040年も見据え
 - i .「地域包括ケアシステムの推進」
 - ii .「自立支援・重度化防止の取組の推進」
 - iii .「介護人材の確保・介護現場の革新」
 - IV .「制度の安定性・持続可能性の確保」

②令和3年度報酬改定

介護職員処遇改善加算等の職場環境等の要件

【職場環境要件の6つの区分】

- A) 入職促進に向けた取り組み
- B) 資質の向上やキャリアアップに向けた支援
- C) 両立支援・多様な働き方の推進
- D) 腰痛を含む心身の健康管理**

腰痛を含む 心身の健康管理	介護職員の身体の負担軽減のための介護技術の修得支援 介護ロボットやリフト等の介護機器等導入及び研修等による腰痛対策の実施
	短時間勤務労働者等も受診可能な健康診断・ストレスチェックや、従業員のための休憩室の設置等健康管理対策の実施
	雇用管理改善のための管理者に対する研修等の実施
	事故・トラブルへの対応マニュアル等の作成等の体制の整備

3.福祉用具の導入で得られる効果

- ① 施設概要について
- ② 課題
- ③ 取組み内容
- ④ 得られた効果について

①施設概要について

入所定員や施設の形状等

特別養護老人ホーム 悠悠タウン江波

A) 入所定員：100名（長期入所80名・短期入所20名）

B) 従来型（合計50名の2フロアー）

1人部屋：4部屋

2人部屋：5部屋

4人部屋：9部屋

C) 形状が扇型

・中央にデイルーム等

・端が見えない



①施設概要について

職員の勤務配置

- A) 介護職員の基本配置数(各階50名)
- ・フルタイム職員 15名(正社員11名・パート4名)
 - ・短時間職員等 1名以上
 - ・その他補助職員 数名
- B) 勤務シフト(各階50名)
- ・3交代制
 - 日勤帯 6名
 - 準夜勤 2名
 - 深夜勤 2名 合計10名/1日

①施設概要について

福祉用具の導入状況と設置場所

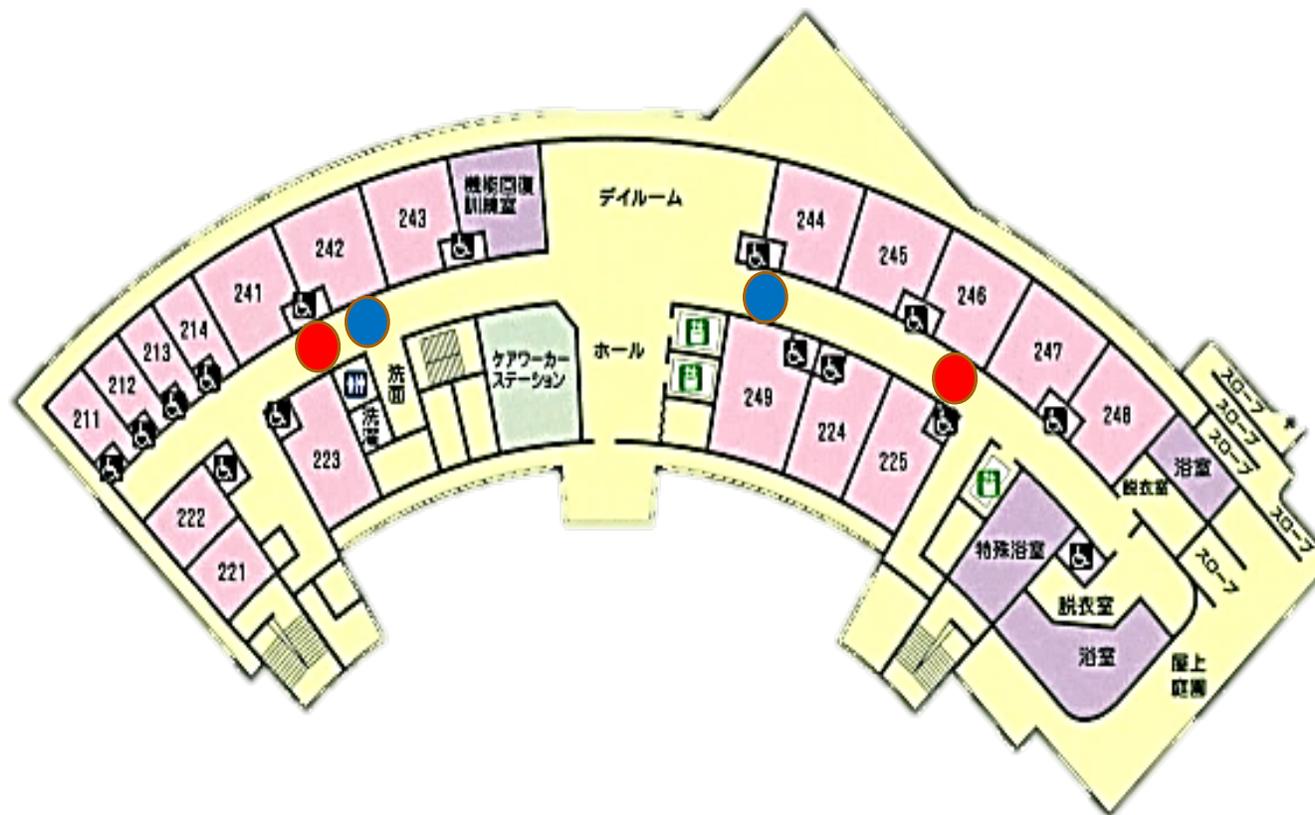


● で設置場所を示す

H22 2台導入

H31 2台導入

※1台はデイサービスと兼用



● で設置場所を示す

H27 1台導入

H29 1台導入

R1 2台導入

②課題

研修体制・指導体制が確立していない事

- A) 福祉用具の効果が分からない
- B) 福祉用具の使用対象者が分からない

【福祉用具を導入し介護現場で活用する為には】

- **福祉用具に関する正しい知識**
- **正しく使用する為の介護技術の習得が必要**

③取組み内容

移動用福祉用具(車椅子など)の点検確認

A) 2017年5月 開始

- ・頻度:月に1回 (その他随時)
- ・担当:介護職員が利用者の2~5名

B) 目的

- ・移動用福祉用具の安全と安心を図るため
- ・介護職員が、福祉用具に対する意識の高揚と適切に使用が出来ているかを確認のため

C) 内容

- ・空気、ブレーキの性能確認と清潔度や適合の点検と確認

③取組み内容

介護技術・腰痛対策チームの設立

- A) 2018年度 『介護技術・腰痛対策チーム』の設立
 - ・構成:5名(内訳:機能訓練指導員 1名 / 介護職員 4名)
- B) 職員選出の目的
 - ・人材育成(OFF-JT)
- C) 活動内容
 - ・現場における問題の抽出と改善の取組み(会議1回/月)
 - ・施設内研修(特養又は他部署/1回約30分～最大60分)
 - ・現場指導

③取組み内容

施設内(特養)研修の実施内容

実施年度	2018年度	2019年度	2020年度
実施回数	8回	11回	1回
研修内容	総論: 業界問題(腰痛)	総論: 業界問題(腰痛)	総論: ※コロナの為資料のみ
	移乗技術: スライディングボード	総論: 福祉用具使用の効果等	移乗: スライディングボード
	重心移動等: スライディングシート	立上り・立位: スタンディングリフト×2回	
	シーティング技術: 車椅子	起居・移乗: スライディングボード×2回	
	起居介助技術	褥瘡(臥床での圧): ベッドマット・圧計測	
	ポジショニング技術	ポジショニング: マルチグローブ	
	ノーリフティング: 福祉用具活用等	スタンディングリフト	
	車椅子の修理方法	床走行リフト	
		座位姿勢	

③取組み内容

マニュアルとチェック表を用いた介護現場での指導

スライディングボードのマニュアル

【必要技術】

- 起居（起き上がり）介助
- スライディングボードの使い方の
- 車椅子の知識・座り直しの介助
- ベッドの高さの調節

（今回はベッドを高く車椅子を低くする）

①側臥位にして起きた時にスライディングボードが臀部になるよう設置します。



足にあたらぬ程度に車椅子を寄せます。

②端座位になります。



端座位が難しい利用者
ギャッジアップ機能を使用し上半身を起こします。
起こす際利用者を前傾にし、腰のあたりを支えます。



③起きたら再度車椅子を寄せます。



ボードの位置は車椅子の座面の半分にのるくらい。
（写真の位置）

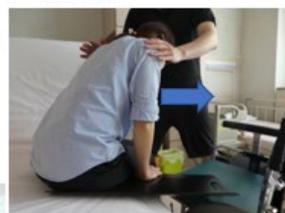
スライディングボードを動かす際、利用者の足（脛裏）
を傷つけない様になります。

スライディングボードに身体が乗っている状態なので滑り落ちない様に。

作成：令和2年度 介護・腰痛プロジェクト

複合的な技術を活用

⑤歯種に傾けます。



※重心が後ろだと前へずり落ちるリスクがあります。



⑦移乗途中（スライディングボード真ん中）、一旦止めて利用者の身体の向きを変えます。



手の位置を変えません、
身体の向きを変えたらその方向に傾けます。

⑧スライディングボードを上へ上げ抜いています。



⑥移乗先へ身体を傾け、「重心」を移動させます。



今回の移乗の場合（ベッドから車椅子方向）
【左腕】腰の下から手を入れ肩甲骨あたりを支えます
【右腕】腰のあたりを支えます。
※利用者の手の位置に注意します。

⑧そのまま「重心」を移動させて移乗します。



スライディングボードのチェックリスト

作成：令和2年度 介護・腰痛プロジェクト

評価日（ 年 月 日）

実践者（ ） 評価者（ ） 利用者（ ）

（ベッドから車椅子への移乗の場合）

評価方法	該当する番号に ○をしてください。
3-できている	
2-できているが難しい又は間違っている	
1-できていない	
第1工程（説明と同意）	評価(2)
①これから行う介助行為について、利用者へ説明します。	3 [○] 2 [○] 1 [○]
②出来るところは自力で行ってもらえるか確認の声を掛けます。	3 [○] 2 [○] 1 [○]
第2工程（車椅子とベッドの準備）	評価(4)
①移乗用のアームサポートを外します。	3 [○] 2 [○] 1 [○]
②★ファットサポートを外します。（両側）	3 [○] 2 [○] 1 [○]
③車椅子のブレーキをかけ、少し離れたところに置きます。	3 [○] 2 [○] 1 [○]
④ベッドの高さを車椅子より少し高めに調整します。	3 [○] 2 [○] 1 [○]
第3工程（ベッド端座位になる）	評価(5)
①ベッド欄を外します。	3 [○] 2 [○] 1 [○]
②利用者を側臥位になるように介助します。	3 [○] 2 [○] 1 [○]
③端座位になった時、臀部の1/3がボードに乗るようにベッド上に置きます。 （先に端座位を取り、その後ボードを差し込んでも良い）	3 [○] 2 [○] 1 [○]
④★利用者をベッドサイドへ端座位になれるように介助します。 （この時、座りが浅すぎるとずり落ちる可能性があるので要注意）	3 [○] 2 [○] 1 [○]
⑤起き上がりの後、ふらつき等の体調不良がないか確認します。	3 [○] 2 [○] 1 [○]
第4工程（移乗の準備・利用者）	評価(5)
①車椅子を利用者の足に当たらないようにベッドへ近づけます。	3 [○] 2 [○] 1 [○]
②★車椅子のブレーキがかかっているか確認します。	3 [○] 2 [○] 1 [○]
③ボードを車椅子の座面の平面上に乗るように動かします。	3 [○] 2 [○] 1 [○]
④★移乗時の捻じれを少なくするために、利用者の足を車椅子側へ動かします。	3 [○] 2 [○] 1 [○]
⑤（可能な方のみ）利用者に車椅子のアームサポートを持ってもらいます。	3 [○] 2 [○] 1 [○]

裏面へ続く

④得られた効果

職員への効果

【アンケート実施】

2019年10月

【対象】

本会の特別養護老人ホーム 悠悠タウン江波に配属の
介護職員 32名（男性11名・女性21名）

【回収率】

100%

④得られた効果

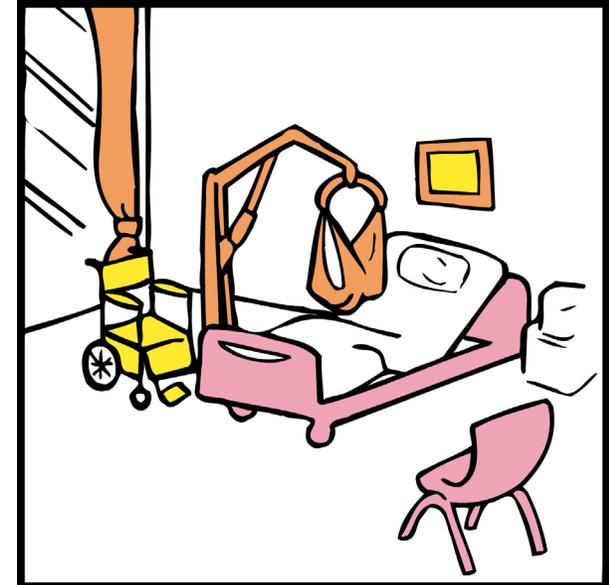
職員アンケート結果 1

《質問》

取組みが福祉用具活用に繋がっているか？

《回答結果》

- ・効果有**78.1%**
- ・どちらとも言えない**21.9%**



④得られた効果

職員アンケート結果 2

《質問》

取組みが介護技術向上に繋がっているか？

《回答結果》

- ・効果有**87.5%**
- ・どちらとも言えない**12.5%**

④得られた効果

職員アンケート結果 3

《質問》

福祉用具の活用が腰部の負担軽減に繋がっているか？

《回答結果》

- ・効果有**87.5%**
- ・どちらとも言えない**12.5%**



④得られた効果

利用者への効果

分類	ヒヤリハット等事故発生状況				
	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度
転倒件数	291	271	166	192	171
骨折・脱臼	8	12	4	6	4
その他外傷	7	7	1	2	3
皮膚損傷	419	379	222	184	177
ヒヤリハット 件数(総数)	972	900	548	589	541

2018年度より取組みを開始

③得られた効果

得られた効果からの結果

A) 職員への効果

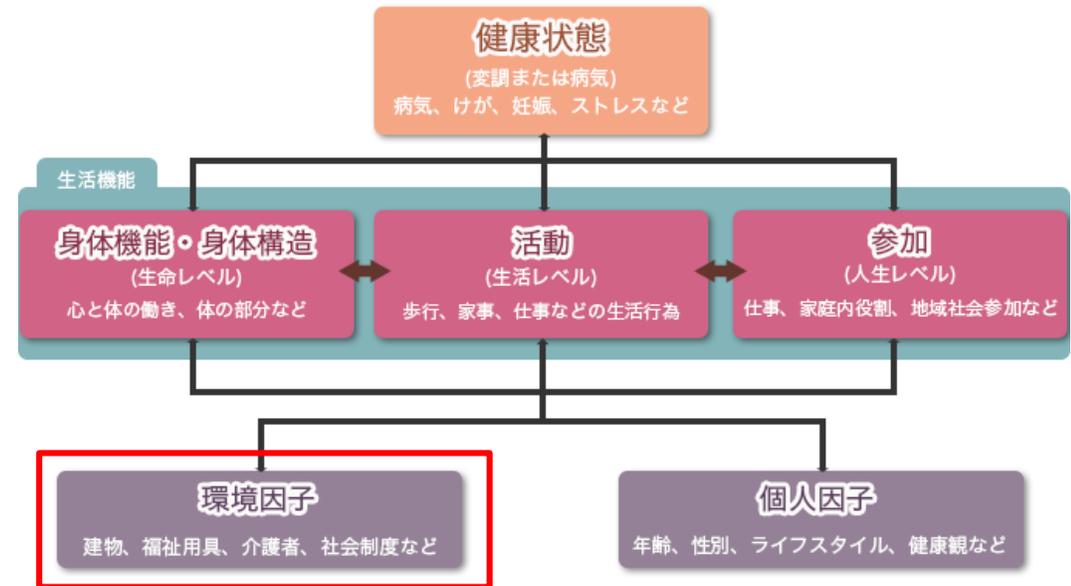
- ・介護技術(スキル)の向上
- ・腰部を含めた身体的負担軽減

B) 利用者への効果

- ・サービスの向上
- ・事故や二次障害の減少

C) 結果として経営への効果

- ・職員や利用者への効果が結果として経営を安定させる



4.新たな課題

- ① 介護現場で福祉用具を運用する際に
残されている課題
- ② 人材育成(キャリアパス・OJT・OFFJT など)
- ③ ICT化等の取組み

ご清聴ありがとうございました



社会福祉法人 福祉広医会

特別養護老人ホーム 悠悠タウン江波

住所: 広島県広島市中区江波西2丁目14-8

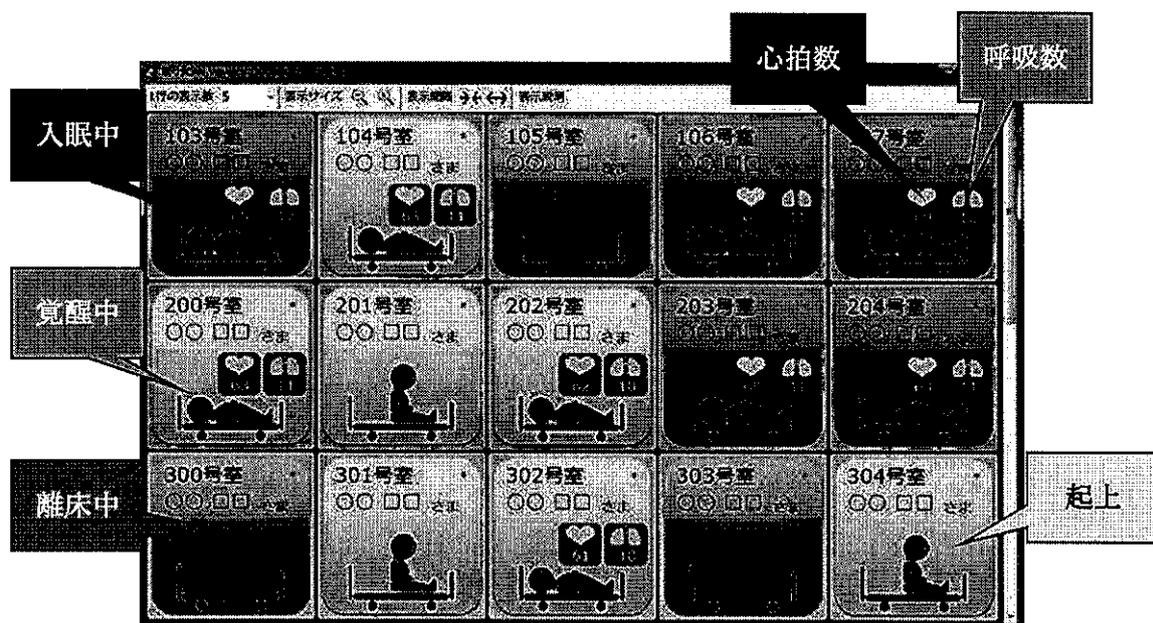
令和3年度 介護ロボット活用ミーティング

ーリスクの可視化による負担減と介護意識の向上：概要ー

社会福祉法人 幸生会 特別養護老人ホームクラリス 友野治真

当施設では、パラマウントベッド社が販売している『眠りSCAN（スキャン）』という、介護ロボットを全室に導入しております。眠りSCANとはベッドに設置したセンサーにより、体動（呼吸、心拍など）を測定し、睡眠や離床状態を把握する見守りシステムです。

【介護ロボットの導入効果】



・入居者様の現在の状態を PC 画面やスマホ・タブレットで即座に視認出来る

・通知設定により、起上時や心拍・呼吸低下の早期発見が行える

・睡眠日誌による入床時の習慣や情報が蓄積される

・呼吸日誌・心拍日誌によって、長期的な体調変化に気づくことが出来る

これらの情報を活用することで、入居者様の眠りの質の向上や転倒事故リスクの軽減、介護職員の身体的・精神的な負担の軽減に成功しています。また、睡眠日誌等のデータから、睡眠時間や覚醒・離床回数、起床時刻、徘徊などを把握でき、昼夜逆転されている場合、昼の離床時間や活動時間を増やし、夜の訪室を覚醒時にすることで生活の改善が行われています。睡眠の質が向上することで、睡眠導入剤や睡眠薬の調整も行えます。

介護職員にとって負担が大きくなる夜勤帯の就業においても、負担軽減に大きく寄与していますし、ICTを活用することで、より高度な介護知識・技術を必要とする場面が増え、おのずからそれらの習得も行われています。ご利用者様により良いサービスを提供するため、ICTによって介護職員の負担軽減と作業効率の向上が行われ、そこからのフィードバックによって介護職員の知識・技術が行われる。ひいては介護に携わる人間としてのプロ意識や自己肯定感の向上も行われていると考えます。

移乗とは

市 福祉技術研究所株式会社

市川 洸

【移乗を考える大切な要因】

1. 移乗はケアの質のバロメーター
2. 多様な方法の中から最適な方法を選択
適応・不適応を明確に
3. 利用者・介助者双方が安心・安全・快適な方法で
介助者は力仕事をしない
自分でできることは自分で
すべてを介助者がしない
4. 移乗は危険を伴う動作
正確な技術の習得を
訓練要素は原則として含めない。慎重に

1. 移乗はケアの質のバロメーター

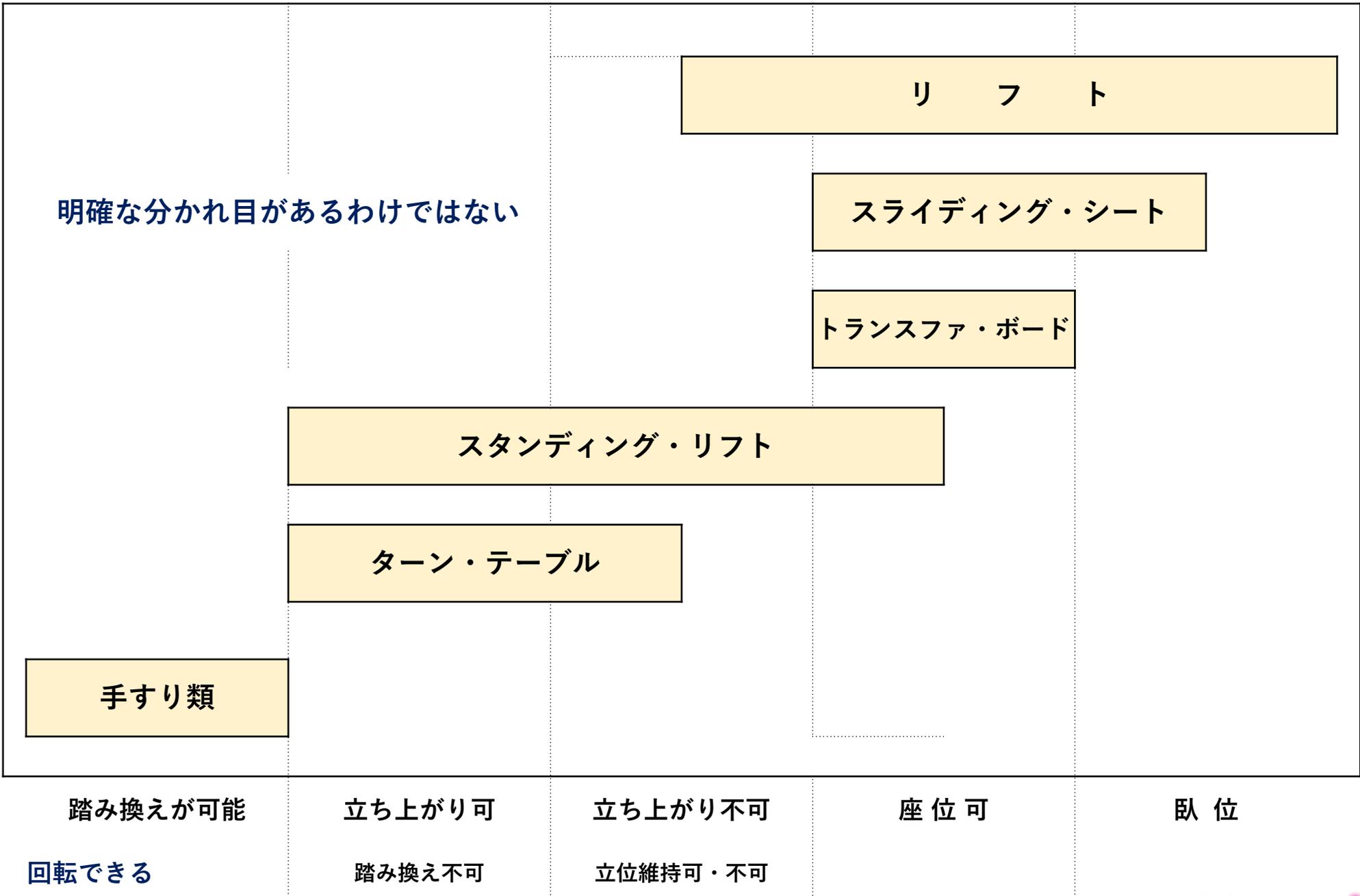
- ・ 質の高いケア = 頻度高い移乗
- ・ 頻度高い移乗が生活を広げる
→ 双方が安全で快適な方法で
普通の生活をするために
- ・ 介助が大変だから → 頻度を少なく
これは本末転倒
ケアの目的・目標を考えよう

2. 多様な方法から最適な方法を選択する

移乗に利用される用具はたくさんある

身体機能に応じて、介助者に応じて、
生活目標に応じて、最適な方法を選択する

福祉用具の種類



【適応・不適応を明確に】

福祉用具にはそれぞれ適応と不適応がある

どのような条件なら利用できるか
どのような状態になったら利用できないか

高齢者は状態が変化しやすい
不適応になったら次の手段を

例えば：座位移乗の条件

(トランスファーボード、スライディングシートなどを利用)

①移乗元と移乗先の高低差を調節できる(環境の適応)

②骨盤・体幹を前傾できる(身体機能の適応)

3. 利用者・介助者双方が安全で安心で快適

利用者から

介助者は力仕事をしない

介助者が発揮した力はすべて利用者に加わる

→快適でない、皮膚の内出血・肋骨の骨折など

介助者から

自分の体を守る→無理をしない

仮説：ケアに起因する筋緊張の亢進

① 介助の技術

移乗介助など不適切な介助技術による恐怖、痛みなど
→ 不快感、恐怖や痛みからの筋緊張
主として、介助者の力仕事に起因すると想定される

② 苦痛を与える座位

適合していない車いす、座圧を分散しないクッションなど
→ 姿勢の崩れ、不快感、痛みなどからの筋緊張

③ 苦痛を与える臥位

堅いマットレス、一定圧の継続など
→ 血流の阻害、廃用などによる筋緊張

ケアの基本：自分でできることは自分で

**介助者がすべてをしない
動作ができないときは何ができないかを考えよう**

**自分でできる部分は自分で
+
できない部分を福祉用具で
+
最後に介助者が手助け**

立位移乗の4段階

1st

立ち上がる



2nd

立位を維持



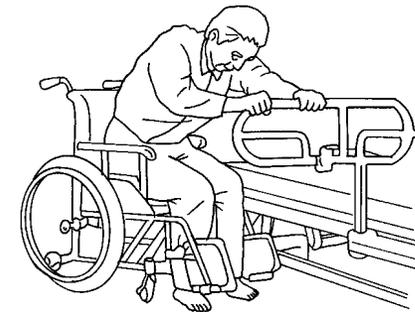
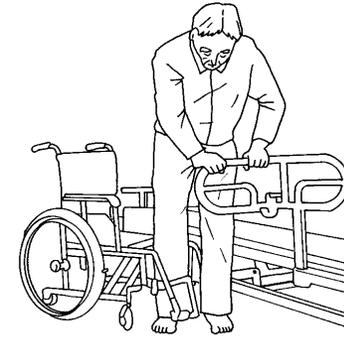
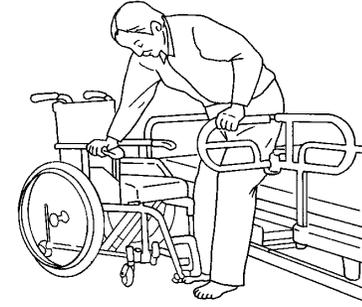
3rd

足踏み(回転)



4th

静かに着座



最初に現れる現象は

足の回転ができない
(足の踏みかえが不十分)

この問題の解決策
ターン・テーブル

立ち上がる

立位を維持

~~足踏み(回転)~~

静かに着座

4. 移乗は危険を伴う動作

「生きていくことはリスクを伴うもの」とは言われるが
可能な限りリスクを小さく

正確な介助の技術の習得を
福祉用具は使い方が命

→様々な使い方が獲得されなければならない

形を覚えるのではなく、なぜそうするのかを理解する
技術の伝達システムの再構築を（特に施設の介護職）

移乗動作に訓練要素を安易に含めないor慎重に

移乗動作・移乗介助は難しい動作

ていねいに、正確な技術を支援する
体の動きと用具の性能をマッチングさせ、
一人一人の状態や使用場面に応じた使い方を支援する

誰にでも利用できる方法はない
一人一人に合わせる→まさしく多様性が要求される